

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

第 66 回日本消化器外科学会総会 名古屋.
2011

JDDW 2011. 福岡. 2011

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得 なし

2. 実用新案登録 なし

3. その他 なし

厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）

研究分担者 報告書

国内外科手術成績を基礎とした経口抗がん剤による治癒切除大腸癌術後補助療法の確立

研究分担者 八岡 利昌 埼玉県立がんセンター 消化器外科医長

研究要旨：JCOG0910研究において、適格基準を満たす昨年度のstage IIIa症例90%からICを取得し、研究に登録することができた。自施設の症例について検討する。

A. 研究目的

現時点でJCOG0910に登録した自施設症例について検討する。また高齢者大腸癌の増加に伴い、今後遭遇すると予想される高齢者大腸癌に対する術後補助化学療法の現況を自験例で解析する。

B. 研究方法

(1) 2010年9月17日から2012年1月31日までに当センターでJCOG0910にエントリーした症例の短期成績を検討した。

(2) 1971年当院開設以来、2012年1月31日までの原発性大腸癌3467例のうち85歳以上の超高齢者の術後補助療法施行状況を解析した。

(倫理面への配慮)

ヘルシンキ宣言および「臨床研究に関する倫理指針」「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」に従って研究を実施した。担当医による口頭の説明と同時に、十分なインフォームドコンセント(IC)を行い、説明同意書で同意を取得した。

C. 研究結果

(1) 2012年1月31日まで26例(男性15,女性11)のStage III症例をJCOG0910にエン

トリーした。内訳は、A群：カペシタビン療法(1コース：14日間連続経口投与+1週間休薬)13例(男性9,女性4)、B群：TS-1療法(1コース：28日間連続経口投与+2週間休薬)13例(男性6,女性7)であった。東北地方太平洋沖地震のため当院で手術を受け、その後宮城県立がんセンターへ転院した症例以外は当院でフォロー中である。

(2) 2012年1月31日までに原発性大腸癌3467例を治療した。平均年齢63歳(16~93)、85歳以上の超高齢者41例(1%)である。StageIIおよびIIIで術後補助化学療法が施行された超高齢者は13%であり、成人の64%に対して大幅に少なかった(P=0.013)。

D. 考察

本邦における大腸癌における手術成績は諸外国に比較して非常に良好である。さらなる治療成績の向上のためには適切な術後補助療法の確立が重要と思われる。そのため、われわれの施設ではがん臨床研究事業に参加し、積極的に症例を本研究にエントリーするよう努力している。昨年一年間の適格基準を満たすstage IIIa29例中26例からICを取得し、症例登録することができた。また高齢者の治療成績はまだ改善の余地があると考えられる。特に治癒切除高齢者大腸癌の術後補助療法の検討が必要である。

E. 結論

昨年度は適格基準を満たす stage IIIa 症例の 90%から IC を取得し、JCOG0910 に登録することができた。この成果は、高齢者に対する補助化学療法のエビデンス構築に応用可能と思われる。

F. 研究発表

1. 論文発表

野津 聡, 西村洋治, 八岡利昌. CT コロノグラフィにおける鎮痙剤の必要性和体位変換の方向. 日本大腸検査学会雑誌 . 28(2) 22-26, 2011

八岡利昌, 西村洋治, 坂本裕彦, 田中洋一, 山口研成. 直腸癌術後傍大動脈リンパ節再発に対して FOLFIRI 療法が奏功した 1 例. 癌と化学療法 38(12) 2057-2059, 2011

2. 学会発表

八岡利昌, 赤木究, 西村洋治, 他. 大腸癌における Predictive & Prognostic marker としてのマイクロサテライト不安定性と MAP kinase 経路の解析. 第 66 回日本消化器外科学会総会. 23. 7, 名古屋

八岡利昌, 西村洋治, 坂本裕彦, 他. 大腸癌に対する Reduced Port Surgery の利点、欠点. 第 73 回日本臨床外科学会総会. 2011. 11, 東京

八岡利昌, 西村洋治, 坂本裕彦, 他. 右側結腸癌の標準術式 -OS・HALS・LAC-. 第 66 回日本大腸肛門病学会学術集会. 2011. 11, 東京

八岡利昌, 西村洋治, 坂本裕彦, 他. 癌専門施設における大腸癌の Reduced Port Surgery の現況.

第 24 回日本内視鏡外科学会総会. 2011. 12, 大阪

Toshimasa Yatsuoka, Yoji Nishimura, Hirohiko Sakamoto, et al. A NEW PORT ENTRY DEVICE (EZ ACCESS) FOR SINGLE INCISION LAPAROSCOPIC COLECTOMY. SAGES 2011. 2011, 3. サンアントニオ

Toshimasa Yatsuoka, Yoji Nishimura, Hirohiko Sakamoto, et al. SINGLE INCISION LAPAROSCOPIC COLECTOMY FOR COLON CANCER: TECHNICAL ASPECTS AND FEASIBILITY. 19th International Congress of the EAES, 2011. 6, トリノ

Toshimasa Yatsuoka MD, Kiwamu Akagi MD, Yoji Nishimura MD, et al. Microsatellite instability status in colon cancer and adjuvant chemotherapy for Stage II disease. International Surgical Week ISW2011. 23. 8, 横浜

G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

研究要旨：大腸癌肝転移の切除症例を対象 FOLFOX, FOLFIRI, XELOX 等の新規化学療法の導入前後における当科での治療成績を検討した。FOLFOX, FOLFIRI, XELOX 等の新規化学療法は、特に同時性肝転移症例の治療成績の向上に寄与し、全体の治療成績を向上させた。その要因として、新規抗癌剤を用いた補助化学療法による、肝切除後の再発抑制および再肝切除率の向上が考えられた。

A. 研究目的

大腸癌化学療法において、2005年に新規抗癌剤（Oxaliplatin）が保健適応となり、FOLFOX, FOLFIRI, XELOX 等のレジメンの開発やこれに続く分子標的薬の使用で治療成績が向上した。今回、大腸癌肝転移の切除症例を対象にこれら新規化学療法の導入前後における当科での治療成績を検討した。

B. 研究方法

2001年1月から2010年10月までに大腸癌肝転移に対して切除術を施行した109例のうち化学療法未施行の42例を除いた67例、FOLFOX, FOLFIRI 等の新規化学療法開始前の症例；前期群（n=23）、開始後の症例；後期群（n=44）として治療成績を比較検討した。

（倫理面への配慮）

当センターにおけるIRBの承認を得たretrospectiveな臨床研究である。

C. 研究結果

平均年齢、性別、肝転移 Grade, 肝切除 R0 の割合の背景因子に有意な差を認めなかった。前期群と後期群での化学療法の変化は、術後補助および切除不能再発に対する化学療法内容の刷新と、肝切除後には原則未施行だった化学療法を後期群で積極的に導入した点が異なった。前期群と後期

群の生存率を比較すると原発巣切除術後の5年生存率：22.8%/75.4%（P=0.01）、肝転移切除後の5年生存率：30.4%/38.1%（P=0.0008）、同時性肝転移切除術後の5年生存率：0%/56.1%（P=0.0009）、と後期群が有意に長期生存を得ていた。異時性肝転移症例では有意な差を認めなかった。同時性肝転移症例において、後期群では肝切除後に71.4%が再発しその66.7%に再肝切除を施行し、前期群では全例が再発しその28.6%に再切除が施行され、後期群では再発の抑制と再肝切除可能である再発形式が多い傾向があった。後期群では同時性肝転移切除後において、新規化学療法を補助療法として結果的に無再発例では100%に、再発症例では53.3%に施行していた。また再肝切除施行症例では70%に、再肝切除不能症例では20%に施行していた。

D. 考察

以上から後期群では術後補助療法として新規化学療法を施行した事で再発が抑制され、かつ再肝切除率が向上した可能性があると考えられた。

E. 結論

FOLFOX, FOLFIRI, XELOX 等の新規化学療法は、同時性肝転移症例の治療成績の向上に寄与し、全

体の治療成績を向上させた。その要因として、新規抗癌剤を用いた補助化学療法による、肝切除後の再発抑制および再肝切除率の向上が考えられた。

F. 研究発表

1. 論文発表

Tsujinaka S, Konishi F : Drain vs No Drain After Colorectal Surgery. Indian J Surg Oncol 2 (1) 3-8 2011

Yamamoto H, Sekimoto M, Oya M, Yamamoto N, Konishi F, Sasaki J, Yamada S, Taniyama K, Tomonaga H, Tsujimoto M, Akamatsu H, Yanagisawa A, Sakakura C, Kato Y, Matsuura N : OSNA-Based novel molecular testing for lymph node metastases in colorectal cancer patients: Results from a multicenter clinical performance study in Japan.

Ann Surg Oncol 18 1891-1898 2011

2. 学会発表

加藤高晴、野田弘志、遠山信幸、小西文雄 : 新規抗癌剤導入前後における大腸癌肝転移の切除成績の比較。第 23 回日本胆管膵外科学会・学術集会 - 第 1 回高度技能医誕生記念大会 2011.6.8-10 東京

(プログラム・抄録集 p210)

辻仲眞康、富樫一智、小西文雄、森嶋 計、佐々木純一、宮倉安幸、堀江久永、河村 裕、安田是

和 : 大腸SM癌のリンパ節転移予測における先進部の低分化胞巣および粘液化の意義。第 75 回大腸癌研究会 2011.7.8 東京 (プログラム・抄録集 p24)

市田晃佑、辻仲眞康、河村 裕、小西文雄、武藤雄太、佐々木純一、桑原悠一、前田孝文 : 超高齢者大腸癌症例に対する腹腔鏡手術および開腹手術の周術期成績の比較検討。第 66 回日本消化器外科学会総会 2011.7.13-15 名古屋 (デジタル抄録集 571)

Konishi F : The Japanese approach to the treatment of colorectal cancer. Frontiers in intestinal and colorectal disease Ninth annual international congress 2011.11.29-12.1 London

G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

研究分担者 齋藤 典男 国立がん研究センター東病院 下部消化管外科長

研究要旨：癌の外科治療において画一的な予防的リンパ節郭清が行われるのは、その転移診断が充分でないことが主たる原因である。この状況で腫瘍学的安全性を担保するために、予防的な広めのリンパ節郭清を行うことは極めて常識的な判断である。今後大腸癌における術前診断精度の追及は、リンパ節郭清範囲の縮小、あるいは省略を実現しうる可能性がある。

A. 研究目的

大腸癌におけるFDG PET/CTを中心にそのリンパ節転移診断能を評価し、リンパ節郭清にPET-CTがいかに寄与し得るかについて考察した。

B. 研究方法

2004年より大腸癌術前診断として207例にFDG PET-CTが施行された。微小なリンパ節転移描出に特化した条件設定としてFDGを10mCi投与後90分後より撮像を開始し10分の収集条件にて画像を構築した。術前リンパ節転移診断は、描出リンパ節のSUV (Standardized Uptake Value) を用いたcut-off値に基づき行われた。診断はリンパ節領域ごとに病理診断と対応させた。また、同一患者の術前診断としてFDG PET/CTとFLT PET/CTを行いその術前診断の意義を比較検討した。

(倫理面への配慮)

本研究はretrospective studyであり、倫理上の問題は生じないと考える。また、患者個人のプライバシーに関することは公になることはないため、倫理上でとくに問題となることはないと考えられる。

C. 研究結果

1. リンパ節転移へのFDGの非転移と比較した有意な集積がSUV値により示された。特に原発巣より離れた2群以上のリンパ節でその傾向は強く示された(2群リンパ節転移の平均SUV=7.2, $p \leq 0.001$ 、1群リンパ節転移の平均SUV=3.8, $p=0.009$)。その結果、2群リンパ節転移診断におけるaccuracy/sensitivity/specificityは89%/63%/96%と良好でCTやPET単独の診断能を凌駕した。一方1群リンパ節転移に対する診断は特に炎症所見を伴う症例で偽陽性を示すことで精度低下を招くことが分かってきた。
2. FDG PET/CTはFLT PET/CTと比較して感度と精度において良好なリンパ節転移診断能を有した。FLT PET/CT画像において、原発の集積性の高い腫瘍がその無再発生存期間が短縮される傾向にあることが示された。

D. 考察

大腸癌術前リンパ節転移診断においてはFDG PET/CTは良好な成績を示したが、治療選択を変えるほどの精度は有していなかった。また、FLT PET/CTは、その集積性から腫瘍の悪性度を反映し得る可能性が示された。

E. 結論

大腸癌術前リンパ節診断におけるPET/CTは、治療選択の根拠とまでには至らなかった。

F. 研究発表

1. 論文発表

Shiomi A, Ito M, Saito N, Ohue M, Hirai T, Kubo Y, Moriya Y. Diverting stoma in rectal cancer surgery. A retrospective study of 329 patients from Japanese cancer centers. *Int J Colorectal Dis* 2011, 26:79-87.

Yoneyama Y, Ito M, Sugitou M, Kobayashi A, Nishizawa Y, Saito N. Postoperative Lymphocyte Percentage Influences the Long-term Disease-free Survival Following a Resection for Colorectal Carcinoma. *Jpn J Clin Oncol* 2011, 41(3):343-347.

Watanabe K, Saito N, Sugito M, Ito M, Kobayashi A, Nishizawa Y. Predictive factors for pulmonary metastases after curative resection of rectal cancer without preoperative chemoradiotherapy. *Dis Colon Rectum* 2011, 54(8):989-998.

Kobayashi S, Ito M, Sugito M, Kobayashi A, Nishizawa Y, Saito N. Association between incisional surgical site infection and the type of skin closure after stoma closure. *Surg Today* 2011, 41(7):941-945.

Shirouzu K, Akagi Y, Fujita S, Ueno H, Takii Y, Komori K, Ito M, Sugihara K; Japanese Society for Cancer of the Colon and Rectum (JSCCR) on Clinical Significance of the Mesorectal Extension of Rectal Cancer. Clinical significance of the mesorectal extension of rectal cancer: a Japanese

multi-institutional study. *Ann Surg.* 2011, 543(4):704-710.

Nishizawa Y, Fujii S, Saito N, Ito M, Ochiai A, Sugito M, Kobayashi A, Nishizawa Y. The association between anal function and neural degeneration after preoperative chemoradiotherapy followed by intersphincteric resection. *Dis Colon & Rectum* 2011, 54(11):1423-1429.

Shiomi A, Ito M, Saito N, Hirai T, Ohue M, Kubo Y, Takii Y, Sudo T. The indications for a diverting stoma in low anterior resection for rectal cancer.: a prospective multicentre study of 222 patients from Japanese cancer centers. *Colorectal Dis.* 2011, 13(12):1384-1389.

Nishizawa Y, Ito M, Saito N, Suzuki T, Sugito M, Tanaka T. Male sexual dysfunction after rectal cancer surgery. *Int J Colorectal Dis* 2011, 26(12):1541-1548.

西澤祐吏、伊藤雅昭、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、齋藤典男、直腸癌に対する腹腔鏡下前方切除における助手の役割、*日鏡外会誌* 2011, 16:125-130.

齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、下部直腸癌に対する周術期（術前・術後）化学放射線療法の有用性、大腸癌—最新の研究の動向—、大腸癌の治療戦略放射線療法、*日本臨床* 2011, 69(3):500-504.

齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、直腸癌に対する低位前方切除、*手術* 2011, 65(6):905-912.

齋藤典男、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、杉藤正典、直腸癌に対する肛門温存手術、*日外会誌* 2011, 112(5):318-324.

2. 学会発表

齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、中嶋健太郎、甲田貴丸、神山篤史。錦織英知、大柄貴寛、佐藤雄、邑田悟、横田満、：超低位直腸癌における治療方針の検討，第111回日本外科学会定期学術集会，紙上開催，第112巻臨時増刊号(1.2)；228, 2011. 5/26-28.

横田満、小林昭広、永井完治、杉藤正典、伊藤雅昭、西澤雄介、中嶋健太郎、甲田貴丸、神山篤史、錦織英知、齋藤典男、：大腸癌肺転移切除後の残肺再発に対する再切除の意義，第111回日本外科学会定期学術集会，紙上開催，第112巻臨時増刊号(1.2)；425, 2011. 5/26-28.

高橋進一郎、木下平、小西大、後藤田直人、加藤祐一郎、齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、木下敬弘、：切除不能同時性大腸癌感転移に対する化学療法奏効後切除の成績と至適治療順序の検討，第111回日本外科学会定期学術集会，紙上開催，第112巻臨時増刊号(1.2)；425, 2011. 5/26-28.

神山篤史、伊藤雅昭、杉藤正典、小林昭広、西澤雄介、田中俊之、悦永徹、中嶋健太郎、甲田貴丸、錦織英知、齋藤典男、：3T MRIを用いた直腸癌に対する深達度評価の検討，第111回日本外科学会定期学術集会，紙上開催，第112巻臨時増刊号(1.2)；543, 2011. 5/26-28.

錦織英知、伊藤雅昭、中嶋健太郎、西澤祐吏、大柄貴寛、佐藤雄、邑田悟、横田満、神山篤史、甲田貴丸、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、齋藤典男、：直腸癌手術における経肛門式減圧ドレーンの臨床的意義を検討するためのPilot study，第111回日本外科学会定期学術集会，紙上開催，第112巻臨時増刊号(1.2)；849, 2011. 5/26-28.

佐藤雄、小嶋基廣、大柄貴寛、邑田悟、横田満、神山篤史、錦織英知、西澤雄介、小林昭広、伊藤

雅昭、杉藤正典、齋藤典男、：直腸・肛門管癌の先進部における低分化胞巢の臨床的特徴，第75回大腸癌研究会，東京；58, 2011. 7/8.

神山篤史、伊藤雅昭、杉藤正典、小林昭広、西澤雄介、錦織英知、辻野幸夫、佐藤敦、齋藤典男、：大腸がんにおける血中循環がん細胞検出技術の臨床的有用性の検討，第66回日本消化器外科学会総会，名古屋；271, 2011. 7/13-15.

西澤雄介、杉藤正典、小林昭広、伊藤雅昭、甲田貴丸、中嶋健太郎、齋藤典男、：横行結腸に対する腹腔鏡下手術の適応，定型化への取り組み，第66回日本消化器外科学会総会，名古屋；374, 2011. 7/13-15.

戸田孝祐、高橋進一郎、加藤祐一郎、後藤田直人、木下敬弘、小西大、齋藤典男、大津敦、木下平、：切除可能大腸癌肝転移に対する周術期化学療法の適応，第66回日本消化器外科学会総会，名古屋；506, 2011. 7/13-15.

中嶋健太郎、伊藤雅昭、錦織英知、神山篤史、甲田貴丸、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、齋藤典男、：直腸癌手術における合併症—縫合不全、狭窄、粘膜脱の治療方法と防止策，第66回日本消化器外科学会総会，名古屋；550, 2011. 7/13-15.

錦織英知、伊藤雅昭、西澤祐吏、神山篤史、甲田貴丸、中嶋健太郎、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、齋藤典男、：治癒切除不能 Stage4 大腸癌に対する腹腔鏡下姑息的原発巣切除の有用性，第66回日本消化器外科学会総会，名古屋；819, 2011. 7/13-15.

Saito N, Nishizawa Y, Sutigo M, Ito M, Kobayashi A, Kohyama A, Nishigori H, Oogara T, Sato Y, Murata S, Yokota M. : Local therapy for high-risk T1 rectal cancer. 6th ESCP, Copenhagen, Denmark, Colorectal Dis. 13 (S6) ;20, 2011. 9/21-24.

- Nishizawa Y, Fujii S, Saito N, Ito M, Nakajima K, Sugito M, Kobayashi A, Nishizawa Y. : Differences in tissue degeneration between preoperative chemotherapy and preoperative chemoradiotherapy for colorectal cancer. 6th ESCP, Copenhagen, Denmark, Colorectal Dis. 13 (6) ;22, 2011. 9/21-24.
- Nishigori H, Ito M, Nishizawa Y, Kobayashi A, Sugito M, Saito N. : The utility of an anal drain to prevent postoperative anastomosis leakage. 6th ESCP, Copenhagen, Denmark, Colorectal Dis. 13 (S6) ;39, 2011, 9/21-24.
- Ohgara T, Saito N, Sugito M, Ito M, Kobayashi A, Nishizawa Y. : Long-term results of anal function after intersphincteric resection for low rectal cancer. 6th ESCP, Copenhagen, Denmark, Colorectal Dis. 13 (S6) ;54, 2011, 9/21-24.
- 神山篤史、小嶋義寛、横田満、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西海雄介、錦織英知、大柄貴寛、佐藤雄、邑田悟、落合淳志、齋藤典男、：8tagell 大腸癌における漿膜弾性板浸潤の診断の有用性の検討，第 49 回日本治療学会，名古屋，46(2) ;476, 2011. 10/27-29.
- 横田満、小嶋義寛、神山篤史、中嶋健太郎、小林昭広、西海雄介、伊藤雅昭、杉藤正典、落合淳志、齋藤典男、：結腸癌漿膜弾性板浸潤の判定が Stage に及ぼす影響，第 49 回日本治療学会，名古屋，46(2) ;476, 2011. 10/27-29.
- 西澤雄介、神山篤史、錦織英知、小林昭広、伊藤雅昭、杉藤正典、齋藤典男、：鏡視下横行結腸癌手術の pitt fall, 第 49 回日本治療学会，名古屋，46(2) ;565, 2011. 10/27-29.
- 小林昭広、齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、西澤雄介、神山篤史、錦織英知、佐藤雄、邑田悟、大柄貴寛、横田満、合志健一、塚田祐一郎、河野眞吾、山崎信義、：低位直腸癌の肛門括約筋温存手術における手術前化学放射線療法と手術単独郡の長期成績，第 73 回日本臨床外科学会総会，東京，72（増刊） ;331, 2011. 11/17-19.
- 伊藤雅昭、齋藤典男、西澤雄介、杉藤正典、小林昭広、： Needis-Clip Surgery による窮極の内視鏡下肛門温存手術，第 73 回日本臨床外科学会総会，東京，72（増刊） ;348, 2011. 11/17-19.
- 横田満、小林昭広、西澤雄介、伊藤雅昭、杉藤正典、齋藤典男、：大腸癌肺転移切除の意義，第 73 回日本臨床外科学会総会，東京，72（増刊） ;363, 2011. 11/17-19.
- 錦織英知、小林昭広、齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、西澤雄介、神山篤史、大柄貴寛、佐藤雄、邑田悟、横田満、：肛門括約筋温存手術の成績と今後の方向性，第 73 回日本臨床外科学会総会，東京，72（増刊） ;370, 2011. 11/17-19.
- 西澤雄介、神山篤史、錦織英知、小林昭広、伊藤雅昭、杉藤正典、齋藤典男、：当科における横行結腸癌に対する内視鏡下手術の knack & Pitfalls, 第 73 回日本臨床外科学会総会，東京，72（増刊） ;418, 2011. 11/17-19.
- 小林昭広、齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、西澤雄介、：直腸癌術後縫合不全ドレナージ中患者の退院と通院，第 73 回日本臨床外科学会総会，東京，72（増刊） ;469, 2011. 11/17-19.
- 邑田悟、伊藤雅昭、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、齋藤典男、：FDG-PET/CT を用いた直腸癌術前のリンパ節転移診断の検討，第 73 回日本臨床外科学会総会，東京，72（増刊） ;989, 2011. 11/17-19.
- 西澤雄介、神山篤史、錦織英知、小林昭広、伊藤雅昭、杉藤正典、齋藤典男、：腹視下横行結腸切除術の pit fall とその対策，第 66 回日本大腸

肛門病学会学術集会，東京，64(9) ;605, 2011.11/25-26.

小林昭広、齋藤典男、杉藤正典、伊藤雅昭、西澤雄介、錦織英知、神山篤史、大柄貴寛、佐藤雄、横田満、邑田悟、河野眞吾、合志健一、山崎信義、：直腸癌局所再発の治療的切除と今後の展望，第66回日本大腸肛門病学会学術集会，東京，64(9) ;621, 2011.11/25-26.

佐藤雄、伊藤雅昭、角田洋之、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、神山篤史、錦織英知、大柄貴寛、邑田悟、横田満、齋藤典男、：大腸癌術前診断における18F-FLT PET/CTと18F-FDG PET/CTの比較，第66回日本大腸肛門病学会学術集会，東京，64(9) ;638, 2011.11/25-26.

神山篤史、杉藤正典、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、錦織英知、齋藤典男、：大腸癌術後の大動脈周囲リンパ節再発に対するリンパ節郭清の有効性の検討，第66回日本大腸肛門病学会学術集会，東京，64(9) ;745, 2011.11/25-26.

西澤祐吏、齋藤典男、藤井誠志、伊藤雅昭、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、：直腸癌術前化学放射線療法と単独化学療法における組織変性の検討，第9回日本臨床腫瘍学会学術集会，横浜 ;2011.7/22.

伊藤雅昭、大平猛、橋爪誠、齋藤典男、：Needle、Clip、Magnetを用いた新たな内視鏡手術手技の開発，第24回日本内視鏡外科学会総会，大坂，16(7) ;337, 2011.12/7-9.

神山篤史、伊藤雅昭、杉藤正典、小林昭広、西澤雄介、錦織英知、齋藤典男、：細径鉗子を用いた腹腔鏡下大腸癌手術の治療成績，第24回日本内視鏡外科学会総会，大坂，16(7) ; 343,

2011.12/7-9.

小林昭広、杉藤正典、伊藤雅昭、西澤雄介、錦織英知、神山篤史、佐藤雄、邑田悟、大柄貴寛、山崎信義、塚田祐一郎、合志健一、河野眞吾、齋藤典男、：腹腔鏡下大腸切除術における腸管展開の工夫，第24回日本内視鏡外科学会総会，大坂，16(7) ;511, 2011.12/7-9.

山崎信義、伊藤雅昭、河野眞吾、合志健一、塚田祐一郎、吉福清二郎、神山篤史、錦織英知、西澤雄介、小林昭広、杉藤正典、齋藤典男、：腹腔鏡下大腸癌手術における臍袞窩部切除の妥当性，第24回日本内視鏡外科学会総会，大坂，16(7) ;511, 2011.12/7-9.

横田満、伊藤雅昭、小林昭広、西澤雄介、杉藤正典、齋藤典男、：腹腔鏡下手術習熟度とexposing time/dessecting time ratio (E/D ratio)との関連，第24回日本内視鏡外科学会総会，大坂，16(7) ;517, 2011.12/7-9.

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）

研究分担者 報告書

国内外科手術成績を基礎とした経口抗がん剤による治癒切除大腸癌術後補助療法の確立

分担研究者 滝口 伸浩 千葉県がんセンター 臨床検査部長

研究要旨 JCOG-0910 (Stage III 治癒切除大腸癌に対する術後補助化学療法としての Capecitabine 療法と S-1 療法とのランダム化第 III 相比較臨床試) の症例集積に参加している。2010 年 4 月より 2012 年 1 月までに 25 例の症例が登録されている。現在は症例集積中であり、今後も症例集積速度が落ちないように、症例集積をしていく予定である。

A. 研究目的

Stage III の結腸癌 (C、A、T、D、S)、直腸癌 (RS、Ra) の治癒切除患者を対象として、術後化学療法としての S-1 療法の有用性を、標準治療であるカペシタビン療法とランダム化比較して、無病生存期間において非劣性であることを検証する。

B. 研究方法

術後補助化学療法として、A 群 (カペシタビン療法) : 1 日カペシタビン 2,500 mg/m² を 14 日間連日経口投与した後、7 日間の休薬期間を設ける。1 日量のカペシタビンを朝食後と夕食後の 2 回に分けて内服する (1 コース=3 週間)。計 8 コースの投与を行う。B 群 (S-1 療法) : 1 日 S-1 80 mg/m² を 28 日間連日経口投与した後、14 日間の休薬期間を設ける。1 日量 of S-1 を朝食後と夕食後の 2 回に分けて内服する (1 コース=6 週間)。計 4 コースの投与を行う。

Primary endpoint : 無病生存期間

Secondary endpoints : 全生存期間、無再発生存期間、有害事象発生割合、治療関連死発生割合、早期死亡割合、Grade4 の非血液毒性発生割合、Grade 2 以

上の手足皮膚反応発生割合

C. 研究結果

現在症例集積中であり、2010 年 4 月より 2012 年 1 月までに 25 例の症例が登録されている。

D. 考察

JCOG-0910 ; 現在症例集積中であり、適応症例は、積極的に症例登録していく予定である。

E. 結論

JCOG-0910 に参加し、再発高危険群の大腸がんに対する術後補助化学療法の標準化の確立に貢献するために積極的に臨床試験を行っていく。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1. 太田拓実, 趙明浩, 山本宏, 貝沼修, 永田松夫, 滝口伸浩, 鍋谷圭宏, 早田浩明, 池田篤, 朴成進, 柳橋浩男 ; 外科における最新画像支援技術の意義 造影 MDCT と MRCP の fusion 画像による 3 次元画像シミュレーションの有用性. 第 111 回日

本外科学会総会、東京、2011年

2. 貝沼修, 山本宏, 早田浩明, 趙明浩, 滝口伸造, 鍋谷圭宏, 池田篤, 太田拓実, 朴成進, 永田松夫; 大腸癌肝転移に対する肝切除と非外科的治療の役割分担 化学療法後に Conversion または Salvage 手術を行った大腸癌肝転移例の検討. 第111回日本外科学会総会、東京、2011年

3. 早田浩明, 山本宏, 永田松夫, 滝口伸造, 鍋谷圭宏, 貝沼修, 池田篤, 趙明浩, 太田拓実, 小西孝宜, 朴成進, 有光秀仁, 柳橋浩男; 大腸癌膀胱浸潤例への術前化学療法による膀胱全摘回避の検討. 第111回日本外科学会総会、東京、2011年

4. Takiguchi N, Soda H, Nagata M, Nabeya Y, Ikeda A, Kainuma O, Cho A, Ota T, Iwase T, Park S, Yanagibashi H, Arimitsu H, Yamamoto H, Denda T; Neoadjuvant therapy for the colorectal cancer mFolfox6+Bevacizumab vs. radiation. 6th Scientific and Annual meeting of the European Society of Coloproctology, Copenhagen, 2011

5. Denda T, Nakamura N, Sudo K, Nakamura K, Minashi S, Hironaka S, Hara T, Soda H, Takiguchi N, Yamaguchi T; Improved overall survival in the patients with metastatic colorectal cancer associated with Ant-VEGF antibody drug and anti-EGFR antibody drug administration. ECCO16, Stockholm, 2011

6. 早田浩明, 山本宏, 永田松夫, 滝口伸造, 鍋谷圭宏, 貝沼修, 池田篤, 趙明浩, 太田拓実, 岩瀬俊明; 大腸癌に対する補助療法の新展開 当科での大腸癌術後補助化学療法の変遷と成績. 第65回日本消化器外科学会総会、名古屋、2011年

7. 早田浩明, 山本宏, 永田松夫, 滝口伸造, 鍋谷圭宏, 池田篤, 貝沼修, 趙明浩, 太田拓実, 岩

瀬俊明, 朴成進, 有光秀仁, 柳橋浩男; 直腸癌に対する直腸前方切除時の残存直腸内洗浄の意義. JDDW2011、福岡、2011年

8. 傳田忠道, 滝口伸造, 山口武人; 消化器疾患における分子標的治療 進行大腸癌の抗癌剤治療における分子標的治療薬の有効性 特に bevacizumab 併用の有効性について. JDDW2011、福岡、2011年

9. 滝口伸造, 早田浩明, 傳田忠道; 骨盤内臓器浸潤を伴う進行大腸癌を対象とした mFolfox6 による術前補助化学療法. 第66回日本大腸肛門病学会学術集会、東京、2011年

10. 早田浩明, 滝口伸造; 大腸癌手術での表層 SSI 予防への取り組み, 第66回日本大腸肛門病学会学術集会、東京、2011年

11. 幸田圭史, 海保隆, 柳沢真司, 松原久裕, 宮内英聡, 滝口伸造, 小林進, 丸山尚嗣, 加藤良二, 横井公良, 小池直人, 大枝良夫, 鈴木孝雄, 落合武徳; Stage III 大腸癌治療切除例への UFT/LV 療法と TS-1 療法の検討 (BCOG-CC02 中間解析). 第49回日本癌治療学会総会、名古屋、2011年

12. 滝口伸造, 早田浩明, 永田松夫, 鍋谷圭宏, 池田篤, 貝沼修, 趙明浩, 太田拓実, 朴成進, 岩瀬俊明, 柳橋浩男, 有光秀仁, 山本宏; 進行下部直腸癌に対する術前補助化学放射線療法の意義と問題点. 第73回日本臨床外科学会総会、東京、2011年

13. 早田浩明, 山本宏, 永田松夫, 滝口伸造, 鍋谷圭宏, 池田篤, 貝沼修, 趙明浩, 太田拓実, 岩瀬俊明, 朴成進, 柳橋浩男, 有光秀仁; がん専門病院での大腸入院クリニカルパスと術後地域連携クリニカルパス. 第73回日本臨床外科学会総会、東京、2011年

3. 書籍

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）

研究分担者 報告書

国内外科手術成績を基礎とした経口抗がん剤による治癒切除大腸癌術後補助療法の確立

研究分担者 正木 忠彦 杏林大学 消化器外科学教授

研究要旨：Stage III の大腸癌の治癒切除患者を対象として、術後化学療法としてのS-1 療法の有用性を、標準治療であるカペシタビン療法とランダム化比較して、無病生存期間において非劣性であることをもって検証する。

A. 研究目的

Stage III の結腸癌（C、A、T、D、S）、直腸癌（RS、Ra）の治癒切除患者を対象として、術後化学療法としてのS-1 療法の有用性を、標準治療であるカペシタビン療法とランダム化比較して、無病生存期間において非劣性であることを検証する。

B. 研究方法

術後適格症例にて無作為割り付けを行い、A群カペシタビンとB群TS-1のいずれか化学療法を行う。Primary endpointは無病生存期間とし、secondary endpointは全生存期間、無再発生存期間、有害事象発生割合、治療関連死発生割合、早期死亡割合、Grade4 の非血液毒性発生割合、Grade 2 以上の手足皮膚反応発生割合とした。

（倫理面への配慮）

JCOG プライバシーポリシー、個人情報の保護に関する法律・ヘルシンキ宣言（日本医師会訳）・臨床研究に関する倫理指針を厳守する。患者登録では姓名は用いず番号にて登録を行っている。

C. 研究結果

開始より現在まで19症例を登録した（A群10例、B群9例）。現在、再発を認めていないがA群10例中5

例にgrade2の手足症候群をみとめ、B群において1例にgrade3の下痢を認めた。その他に際立った有害事象は認めていない。

D. 考察

各群において代表的な有害事象を認めているが重篤なものはない。

E. 結論

検討期間が短く症例数も少ないため、結論的なことはいえない。今後も精力的に症例集積を継続する予定である。

F. 研究発表

1. 論文発表
特記事項なし。
2. 学会発表
特記事項なし。

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

研究要旨：再発高危険群（stage III）の大腸癌に対する治癒切除術後の補助化学療法は再発予防に寄与する。経口抗がん剤による補助化学療法の治療効果や有害事象の差異を検討する。

A. 研究目的

再発高危険群（stage III）の治癒切除術後の化学療法は再発予防に寄与する。補助療法としての経口抗がん剤 Capecitabine の有効性が欧米では示されている。本邦において汎用されている経口抗がん剤 S-1 の Capecitabine に対する非劣性を、効果および有害事象の両面から検討する。

B. 研究方法

インフォームドコンセントの得られた大腸癌 stage III 治癒切除後の患者に対し、術後に Capecitabine 群または S-1 群にランダム化割付け、それぞれ 6 ヶ月間投与し、再発予防効果と副作用について検討する。

（倫理面への配慮）

JCOG データセンターによる中央登録方式で、東京医科歯科大学の患者情報は当院の症例番号により暗号化されている。

C. 研究結果

現在までに当院からは 14 例（標準治療＝Capecitabine 群 7 例、試験治療＝S-1 群 7 例）が登録された。8 例がプロトコール治療を完遂し、5 例は治療継続中である。有害事象により 1 名において治療を中止した。

D. 考察

各群において治療の継続性は良好であり、また、全員において外来通院治療が行われた。

現時点においては、各群とも重篤な有害事象は

発生していない。再発予防効果については、さらなる経過観察が必要である。

E. 結論

現段階では、再発高度危険群に対する治癒切除後の補助化学療法において、両レジメンは治療の継続性においてほぼ同等であり、副作用も軽微である。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) 植竹宏之, 石川敏昭, 杉原健一; 大腸癌の術後

補助化学療法 - 推奨レジメンをどう使い分けるか. 臨床消化器内科 26; 661-666, 2011

2) Kobayashi H, Mochizuki H, Morita T, Kameoka S, Teramoto T, Kameoka S, Saito Y, Takahashi K, Hase K, Oya M, Maeda K, Hirai T, Kameyama M, Shirouzu K, Sugihara K

Characteristics of recurrence after curative resection for T1 colorectal cancer: Japanese multicenter study.

J Gastroenterology 2011;46:203-211

3) Kobayashi H, Enomoto M, Higuchi T, Uetake H, Iida S, Ishikawa T, Ishiguro M, Sugihara K

- Clinical significance of lymph node ratio and location of nodal involvement in patients with right colon cancer.
Digestive Surgery 2011;28:190-197
- 4) Kobayashi H, Mochizuki H, Kato T, Mori T, Kameoka S, Shirouzu K, Saito Y, Teramoto T, Watanabe M, Morita T, Hida J, Ueno M, Ono M, Yasuno M, Sugihara K, Study Group for Rectal Cancer Surgery of the Japanese Society for Cancer of the Colon and Rectum Lymph node ratio is a powerful prognostic index in patients with stage III distal rectal cancer: a Japanese multicenter study.
Int J Colorectal Dis 2011;26:891-896
- 5) 樋口哲郎、宮崎光史、小林宏寿、山内慎一、小野宏晃、加藤俊介、松山貴俊、石黒めぐみ、石川敏昭、飯田聡、植竹宏之、榎本雅之、杉原健一
膿瘍ドレナージ術を先行した腹壁膿瘍合併下行結腸癌の1例
癌と化学療法 2011;38(12):2313-2315
- 6) 山内慎一、植竹宏之、菊池章史、小野宏晃、松山貴俊、加藤俊介、石黒めぐみ、石川敏昭、小林宏寿、飯田聡、樋口哲郎、榎本雅之、杉原健一
肝動脈化学療塞栓療法により長期生存が得られた大腸内分泌細胞癌肝転移の1例
癌と化学療法 2011;38(12):2271-2273
- 7) 小林宏寿、植竹宏之、樋口哲郎、榎本雅之、飯田聡、石川敏昭、石黒めぐみ、加藤俊介、松山貴俊、小野宏晃、山内慎一、増田大機、杉原健一
大腸癌術後多発肝転移に対し化学療法施行後2回肝切除を施行した1例
癌と化学療法 2011;38(12):2301-2303
- 8) 加藤俊介、小林宏寿、飯田聡、樋口哲郎、榎本雅之、杉原健一
低位前方切除術
外科治療 2011:104(増刊)628-633
- <学会発表>
- 1) H Uetake, T Watanebe, T Yoshino, K Yamazaki, M Ishiguro, K Sugihara, Y Ohashi
Clinicopathological features of patients with colorectal cancer among KRAS wild-type p.G13D and other mutations: Results from a multicenter, cross-sectional study by the Japan Study Group of KRAS Mutation in Colorectal Cancer (Abstract#3605)
ASCO2011: Jun. 4, 2011: Chicago, Illinois
- 2) K Sugihara, A Ohtsu, Y Shimada, N Mizunuma, P Lee, A De Gramont, R M Goldberg, M L Rothenberg, T Andre, S Brienza
Allergic reactions (Ars) induced by FOLFOLX4 treatment in colorectal cancer: A comparative analysis between Asian and Western patients (pts). (Abstract#3623)
ASCO2011: Jun. 4, 2011: Chicago, Illinois
- 3) Sugihara K
New strategy for unresectable or not optimally resectable colorectal liver metastasis
21st World Congress of the International Association of Surgeons, Gastroenterologist and Oncologists:
Nov. 10, 2011: Tokyo
- 4) 樋口哲郎、石黒めぐみ、佐藤隆宣、杉原健一

腹壁腫瘍を形成した下行結腸癌の1例

第7回日本消化管学会総会：2011年2月18

日：京都

5) 小林宏寿、固武健二郎、杉原健一

Peritoneal metastasis from colorectal cancer
in Japan:Data from the nationwide registry.

第111回日本外科学会定期学術集会：青森：開
催中止

6) 小林宏寿、樋口哲郎、榎本雅之、植竹宏之、
飯田聡、石川敏昭、石黒めぐみ、加藤俊介、杉
原健一

下部直腸癌に対する側方郭清とTNM分類第7版
による予後の検討

第66回日本消化器外科学会：2011年7月14日：
名古屋

7) 樋口哲郎、石黒めぐみ、小林宏寿、松山貴
俊、加藤俊介、石川敏昭、飯田聡、植竹宏
之、榎本雅之、杉原健一

占居部位(盲腸・上行結腸とS状結腸の比較)に
よる結腸癌の臨床病理学的因子の検討

JDDW2011：2011年10月22日：福岡

8) 小林宏寿、榎本雅之、樋口哲郎、植竹宏之、
飯田聡、石川敏昭、石黒めぐみ、加藤俊介、松
山貴俊、山内慎一、増田大機、杉原健一

右側進行結腸癌におけるD3郭清-アプローチ法
と手術成績

第66回日本大腸肛門病学会：2011年11月25
日：東京

2. 学会発表

植竹宏之、石川敏昭、杉原健一；大腸癌肝転移に
対する術前補助化学療. 当科の治療成績と

TRICC0808試験

第44回制癌剤適応研究会 シンポジウム1

G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

研究要旨：Stage III 治癒切除大腸癌に対する術後補助化学療法としてのCapecitabine 療法とS-1 療法とのランダム化第III 相比較臨床試験

A. 研究目的

Stage III の結腸癌（C、A、T、D、S）、直腸癌（RS、Ra）の治癒切除患者を対象として、術後化学療法としてのS-1 療法の有用性を、標準治療であるカペシタビン療法とランダム化比較して、無病生存期間において非劣性であることをもって検証する

B. 研究方法

JCOG0910に従い、登録、データを得た上でデータセンターへ送っている
（倫理面への配慮）
当院、院内倫理委員会にかけ承認を得ている。

C. 研究結果

現在まで、12名にRCTの参加承諾を得ることができた。

12名の内訳は、1. 78歳女性 S状結腸癌 B群、
2. 57歳男性 Rs直腸癌 A群、3. 61歳女性 Rs直腸癌 B群、4. 57歳女性 S状結腸癌 A群、
5. 68歳男性 上行結腸癌 B群、6. 41歳男性 S状結腸癌、7. 67歳女性 S状結腸癌、8. 60歳男性 S状結腸癌、9. 43歳男性 横行結腸癌、10. 79歳女性 Rs癌、11. 69歳女性 S状結腸癌、12. 63歳女性 上行結腸癌
症例1, 3, 5, 6, 8はプロトコール完了、症例2, 4は副

作用：手足症候群にて本人希望中止、症例7, 11は
副作用：悪心・食欲不振にて本人希望中止、
9, 10, 12は外来経口抗癌剤継続中。

D. 考察

現在までの所、A群の手足症候群とB群の悪心・食欲不振が主な副作用で、生命に関わる重篤な有害事象はなくどちらも比較的 안전한補助化学療法である。

E. 結論

結論をだすには、今後の症例追跡調査の蓄積と分析が待たれる。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Saida Y, Enomoto T, Takabayashi K, Otsuji A, Nakamura Y, Nagao J, Kusachi S. Outcome of 141 cases of self-expandable metallic stent placements for malignant and benign colorectal strictures in a single center, Surg Endosc 25: 1748- 1752, 2011

2. 齊田芳久、榎本俊行、高林一浩、中村陽一、渡邊良平、片桐美和、高橋亜紗子、浦松雅史、桐林孝治、渡邊 学、長尾二郎、草地信也. 大腸癌手術患者の喫煙状況と禁煙の動機付けに関する

- 前向き調査研究. 日臨外会誌 72(10): 2496-2500, 2011
3. 齊田芳久. 総論: 術後患者のチューブ 消化器外科ナースング 16(6): 6-10, 2011
 4. 齊田芳久、榎本俊行、草地信也. 大腸狭窄に対するステント療法. 外科治療 104(6): 818-888, 2011
 5. 齊田芳久. 手術療法 大腸. super select nursing 消化器疾患-疾患の理解と看護計画、前谷 容・遠藤敏子編、2011.8.30. p194-200
 6. Kusachi S, Nagao J, Saida Y, Watanabe M, Okamoto Y, Asai K, Nakamura Y, Enomoto T, Arima Y, Kiribayashi T, Watanabe R, Saito T, Uramatsu M, Sato J. Antibiotic time-lag combination therapy with fosfomycin. J Infect Chemother 17:91- 96, 2011
 7. Kusachi S, Nagao J, Saida Y, Watanabe M, Nakamura Y, Asai K, Okamoto Y, Arima Y, Watanabe R, Uramatsu M, Saito T, Kiribayashi T, Sato J. Twenty years of countermeasures against postoperative methicillin-resistant Staphylococcus aureus infections for postoperative intra-abdominal abscesses. Surg Today, Jpn J Surg 41: 630-636, 2011
2. 学会発表
1. 齊田芳久、榎本俊行、高林一浩、大辻絢子、道躰幸二郎、中村陽一、片桐美和、長尾さやか、岡本 康、渡邊 学、浅井浩司、長尾二郎、草地信也: 大腸癌イレウスに対する緊急内視鏡診断と Self Expandable Metallic Stent 留置術, 第36回日本外科系連合学会学術集会、浦安、2011.6.17
 2. 齊田芳久、草地信也、有馬陽一、中村陽一、榎本俊行、桐林孝治、渡邊 学、浅井浩司、佐藤淳子、長尾二郎: 外科における MRSA 感染の治療戦略、第59回日本化学療法学会総会、札幌、2011.6.24
 3. 齊田芳久、榎本俊行、高林一浩、大辻絢子、道躰幸二郎、中村陽一、片桐美和、長尾さやか、長尾二郎、草地信也: 大腸癌イレウスに対する術前 Self Expandable Metallic Stent 留置術, 第66回日本消化器外科学会総会、名古屋、2011.7.13
 4. 齊田芳久、榎本俊行、高林一浩、大辻絢子、長尾二郎、中村陽一、片桐美和、長尾さやか、道躰幸二郎、児玉 肇、渡邊 学、岡本 康、浅井浩司、草地信也: 大腸癌イレウスに対する術前 Self Expandable Metallic Stent 留置術、第47回日本腹部救急医学会総会、福岡、2011.8.12
 5. 齊田芳久、榎本俊行、長尾二郎: 大腸癌イレウスに対する術前 Self Expandable Metallic Stent 留置術, 第81回日本消化器内視鏡学会総会、名古屋、2011.8.17
 6. Saida Y, Enomoto T, Takabayashi K, Otshuji A, Dotai K, Nakamura Y, Nagao J, Kusachi: Comparison wound bacterial contamination between open and laparoscopic surgery for colorectal cancer patients, International Surgical Week 2011, August 29, Yokohama, Japan
 7. 齊田芳久、高林一浩、榎本俊行、大辻絢子、草地信也(外科)、安藤正浩、濱口宏夫(東京大学理学研究科): 大腸癌とラマン分光、第9回医用分光学会、島根、2011.11.13
 8. 齊田芳久、榎本俊行、高林一浩、大辻絢子、道躰幸二郎、中村陽一、長尾さやか、片桐美和、渡邊良平、岡本 康、浅井浩司、桐林孝治、長尾二郎、草地信也: 腹腔鏡下大腸手術の術中トラブルと開腹移行を含めたトラブルシューティング法について、第73回日本臨床外科学会総会、東京、2011.11.17
 - 9 齊田芳久、浦松雅史、長尾二郎、渡邊 学、岡

本 康、榎本俊行、浅井浩司、桐林孝治、草地信也：1%クロルヘキシジンアルコール液による術野消毒の安全性に関する検討、第73回日本臨床外科学会総会、東京、2011.11.18

10. Saida Y, Enomoto T, Takahashi K, Hasegawa H, Yasuno M, Inomata M, Yamaguchi S, Akagi Y, Asano M, Iwamoto S, Kato T, Kanazawa A, Koyama M, Samura H, Fukunaga M, Funahashi K, Yamamoto H: Nation-wide Survey of Anastomotic Leakage in Rectal Cancer Surgery in Japan 13th congress of APFPCP (Asia Pacific Federation of Coloproctology), 2011.12.3, Bangkok, Thailand

11. Fujita S, Saito S, Moriya Y, Mizusawa J, Nakamura K, Saito N, Kinugasa Y, Kanemitsu Y, Ohue M, Fujii S, Akazai Y, Shiozawa M, Yamaguchi T, Bandou H, Aoki T, Murata K, Shirouzu K, Takiguchi N, Saida Y, Colorectal Cancer Study Group of Japan Clinical Oncology Group: Morbidity and mortality results from a prospective randomized trial comparing mesorectal excision with or without lateral lymph node dissection for clinical stage II, III lower rectal cancer: Japan clinical oncology group study JCOG0212, 2011 ASCO Annual Meeting, June 4, 2011,

McCormick Place, Chicago, Illinois, USA

- G. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）
1. 特許取得 なし
 2. 実用新案登録 なし
 3. その他 なし